女子の使命に就いて

野田義夫

女子は生長して良妻賢母となるのが本來の天職であることは何人も之を疑ふ餘地は無いと思ふ。人間を生物として考へて見れば造物者が抑々人間に男女の別を立てた理由は女子に人類の後繼者となるべき子を生ましむる爲であることは明々白々の事である。されば女子が母たる義務を負ふことは人間と言ふ種族を永く保存するには絶對的に必要にして缺く可らざる條件と言はねばならぬ。女子は妻たり母たることによりて生存の意義を明にし女子の本領を發揮し其の生涯をして價値あらしむるものと言ふべきである。

女子の天職を良妻賢母と考ふるは極めて古い考へであるけれども常に新しい而も最も穩健の主義と言はねばならぬ。若し女子たるものが良妻賢母を以て女子の自然の天職と承認せず女子の存在の理由を無視し自ら進んで斷然結婚を忌避して獨身生活を營む者が多くなれば其の必然の結果は人類後繼者の減少である。即ち

當然增殖すべき人口の減少である。之れを一個の問題とすればとも角大にして之を國家の上から見れば國力衰退の前兆である。人類の大局の上から見れば地上に於ける人間の勢力の衰運に傾けることを證明するものである。斯の如く考ふれば女子も男子も、造物者が男女の別を立てたる根本義に從つて結婚して子女を生み後繼を作つて行くのが、生物としての天然の使命を完うするもので又國家としては國力發展の根柢を作り人類としては種族の永遠繁榮の基礎を固うするものであると言はねばならぬ。勿論獨身生活を送つて居る男子又は女子が大に國家の發展を助け又は人類の進歩に貢獻することは其例に乏しく無いけれども此等は寧ろ少數の除外例と見るべきもので人類一般の原則と見ることは出來ぬ。我々は少數の除外例を以て女子の天職は良妻賢母たるにありと言ふ一般原則を覆すに足らぬと思ふ。

「女子の天職は良妻賢母たるにあり」と言へば一通り女子の此世に於ける使命を說明し盡して居るやうであるけれども今更に一歩を進めて精密に考へて見れば單に良妻賢母と言つたのみでは女子が女子として此世に生れて來た使命の全部を遺憾なく言ひ盡して居るものと見ることは出來ぬ。良妻賢母たるを以て女子の天職なりと言ふ原則を承認する人でも少し思慮を回らせば自から次の疑問を提出せざる

を得ぬのである。

一、女子は男子と結婚して子を生めば直ちに良妻賢母と名けらるゝか。

二、良妻賢母たるものは妻として並に母として特有の任務の外には、何事をも爲してならぬか。

三、結婚せぬ女子又は結婚することの出來ぬ女子は女子の使命を完うする途は全く無いのであるか。

自分は今自分の立場から此三の疑問に對して順次に解答を試みて見やうと思ふのである。

一、女子は男子と結婚して子を生めば直ちに良妻賢母と名けらるゝか。

女子が男子と區別されて此世に生れて來た生物學上の理由は子を生む爲であることは極めて明白であるけれどもさて子さへ生めば母の任務が完了したとは言はれない。動物でも人間に近い猿のやうなものは中々大事に子を育つる。まして人間の育兒には重大な母の任務がある。此任務を善く盡すものが卽ち賢母である。子を生むことは男子の爲し得ざる任務であるから之を女子の天職と言ふのである。けれども子を生んだ計りでは女子の天職を完うしたとは言はれぬ。女子の天職は

子を生んだ上に其子を養育し且つ教育して宜しきを得ぬ以上は決して滿足に盡されたものとは言はれぬ。而も賢母の重任を完うせしむる根柢は母が子に對して有する自然の愛情である。

又良妻と言ふのも唯男子と同棲して居る丈けでは十分では無い。良妻とは通例夫婦相和して家政と言ふ任務をよく盡すものを指すのである。尙進んで一層根本的に考ふれば良妻たるに最も大切の要件は夫婦相愛の情である。若し妻たるものが夫に對する愛情を失つて仕舞つたならば夫婦は其本義を遠ざかつて兩者相和せず家政が紊亂するのみならず假令子が生れても決して母の任務を滿足に盡すことは出來ぬと思ふ。假令愛情なき妻が如何によく家政を整理してもそれは純然たる事務となり了はつて仕舞ふので斯樣な事務計りならば必ずしも妻がせずとも他人が代用が出來るのである。

斯の如く考へて見れば結婚した女子が良妻たるには其骨髓として夫婦相愛の情が絕對的に必要があり子を生んだ女子が賢母たるには其生命として子に對する愛情が缺く可らざるものである。今一歩を進めて此等の愛情は如何にして起つて來たものであるかを考へねばならぬ。

異性の引力は動物に於て一般に見る所で其の根源は性欲の本能的衝動に基いて居ることは疑を容れぬ事である。此點に於ては人間も動物と同一の根本から出發して居るものであると思ふ。併し人間の男女間の愛情は最早本能的衝動的に止まるもので無く明かに意識せられたるもので理性の發達と共に次第に理想せられたものである。換言すれば自己の理想的要求に適合したる異性によりて喚起せらるるものである。

男子と女子とは子を生む上に身體に解剖的生理的相違がある。是は所謂男女の性の第一義又は根本的の相違である。而して此相違が本能的衝動として表はるゝ性慾の根元である。けれども身體上の男女間の相違は決して之に止まらぬ。直接に生殖作用に關係なき幾多の相違がある。此性的差異性卽ち所謂性的特徵は身體の上に止まらず精神の上にも之を認むることが出來る。此等の相違は一言にして之を掩へば男女相反したる性質又は一方に無きものを一方で補ふやうな性質である。換言すれば女子は男子に於てのみ男子は女子に於てのみ愛の理想的要求を發見し得べきものである。男女の性質差異は相反的補足的のものでやがて之が男女相愛の情を喚起する原因となるものである。此等は單に男女相愛の情を喚起する

計りで無く又夫婦として永く愛情を持續して行く根柢であり又愛情自身も夫婦生活によりて自然の發達を遂ぐるものである。

小說的の戀愛は勿論個人に特別の事情があつて千態萬樣の波瀾曲折があるもので一概には言はれぬけれども男子は男子らしく男性の長所を發揮し女子は女子らしく女子の美點を具へたものが戀愛の骨子となるのが原則である。結局男女の性的特徵が男女相愛し夫婦となる連鎖となり夫婦となつて和合圓滿の生活を送る骨髓となると言ふべきものである。

母の其子に對する愛情は自然に女子が生れついて持つて居る天賦の本能に基いたものである。彼の親猿の如きも兒を產んでから二三箇月は哺乳さする計りで無く片時も自分の傍を放さず之を愛護して行くのは所謂親の本能で高等の動物には共通の性質である。人間の親の愛情は哺乳期に止まらず子の一生に貫通し而も動物よりも極めて高尙で且醇美なるものである。而も母の子に對する愛情は女子の心の中に潛んで居るものであるけれども子を產むと共に俄かに覺醒し子を生む前には未だ嘗て感ぜざる程度に感ずるやうになるのである。換言すれば女子は子を產みて始めて人間の母性を發揮するものである。母性は本來人間天賦のものであ

るけれども人類の文化の進歩と共に次第に高尚に旦醇美に赴いたものである。女子として子を産んで母の愛情の無いものはあるまい。けれども理想的に母の任務を盡して居るものも亦少いであらう。之は文化の進歩に伴ひ母の任務の理想が次第に高尚複雜に赴いたからであると思ふ。

妻としての愛情も母としての愛情も動物と違つて人間の價値を發揮して居る所は孰れも女子の特性卽ち性的特徵に基いて居るものである。此女子の自然の特徵卽ち性的の差異がある爲に女子が單に結婚して子を産むと言ふ上に所謂良妻賢母として動物以上の高尚なる任務を盡すことが出來ると思ふ。男女が若し生殖作用の外に何等の性的差異がなかつたならば女子は唯子を産む器械のやうなもので良妻賢母と言ふ事は無意義に終つて仕舞はねばならぬのである。

今日女子の特性と見做されて居る溫和、從順、忠實、貞淑等の如き諸德又は感情が强く意志が弱いとか保守的であるとか言ふのは皆因襲や教育の結果によるもので身體の上はとも角精神上には男女の根本的區別はあるべきものでないと主張するものがある。此說に從へば男女を同一の方法で教育すれば女子の感情は薄らぎ意志が强くなり理性が發達して進歩的とつて男女の區別は無くなつて仕舞ふ。現今の

女子教育は明かに此方向に進みつゝあると言ふのである。此議論にも相當の理由があることは承認するけれども自分は全然之に同意することは出來ぬ。今日の男女の心性の差違は因襲や教育の結果が與つて力あることは勿論である。けれども男女によつて異つた因襲や教育法を生じた理由は決して全然偶然のもので無くて然かあるべき自然又は當然の性質を有して居るものである。殊に身體の上には女子に性的特徴があるけれども精神の上には何等性的特徴が無いと言ふのは事實に反して獨斷に過ぎぬ發動的と受動的との別は既に生殖細胞の上に於て之を見ることが出來る。又女子が自然の狀態に於ても當然に任ずべき母としての務を盡すには今日女子の特性として列擧せらるゝ樣な特性が必要である。之は或る範圍までは人類に近い高等動物に於ても其面影を認むることが出來ると思ふ。女子が子を產み之を育つることは如何なる野蕃時代でも變らぬ天職である。まだ夫婦の制度が成立せぬ原始的人類間にも此事丈けは變らぬのである。育兒と言ふことは自然が女子に與へた動かすべからざる天職である。されば此天職を盡すについて女子が自然に男子と異つた特性を養ひ來ることは決して偶然の事と見るべきものでは無いと思ふ。而も此特性は女子が本來男子と異なつて持つて居る自然の傾向から

發達して來ることも當然の結論と言はねばならぬ。女子の避く可らざる天賦を盡す爲めに自然の心性の傾向から自然に發達して來た女子の性的特徴は如何にそれが因襲と教育とに助けられて居るにせよ女子の自然の特徴と言はねばならぬと思ふ。自分の信ずる所によれば今日の女子の特徴は人爲的の部分が少く無いけれども其基礎は女子の自然の特性にあると思ふのである。

一夫一婦の制度も妻が家事を引受くることも社會の發達と共に漸次に成立したものであることも明白な事實であるけれども女子が家事を引受くるやうになつたのは其の體格腕力の相違は勿論心性上の相違が男女の間に自然の分業を生ぜしめたのである。社會生活上に男女の著しき分業が出來た爲めに男女の特性は益著しくなつて來た。是は勿論最初から全く無い性質が表はれたので無して段々持つて居つた長處が大に發揮されて著しく目に付くやうになつたのである。男女の分業は本來男女の性的差異に基いて起り其性的差異は分業の爲めに益甚しくなつたものと見るべきである。

女子の特性が、幼兒を育つるに男子の特性より適當であることは茲に說明するまでもない。女子の溫和な容貌には幼兒が自然に懷いて來る。母の無限の愛情には

幼兒が自から引つけらるる。家事の上から考へても女子の綿密なこと節儉なこと忍耐力强きこと等は男子より女子の方が適任である。それで若し夫婦の間に分業を行ふとすれば妻が家事を引受くることが自然の順序と言はねばならぬ。夫婦は相愛の情によつて成立するものであるけれども夫婦關係が成立すれば家事は當然妻の任務となつて來るものである。夫婦相愛の情も女子の性的特徵に基くと同樣に家事が女子の任務に屬することも同樣に女子の特性に基くものであると言はねばならぬ。

斯樣に論じて來れば女子が男子と結婚して子を生んだ計りでは下等の動物と何等のかはりが無く女子が若し人間らしくならうとすれば夫婦相愛し女子は家事と育兒とを引受けねばならぬ。そして始めて良妻賢母と言はるべきである。而も良妻賢母の任務を盡すことは女子の性的特徵を發揮する所以である。

近頃女子の間に年來の因襲を脫して無闇に新しがらうとする革命的の自由思想が行はれて居るやうである。結婚をして子を生むのは女子の自然の任務としても家事と育兒とは下女にも出來れば乳母にも出來るから必ずしも妻がやらずともよからう。家事や育兒のやうな事は本來劣等の仕事で男子の仕事に比ぶれば極めて

價値のないものであるから教育ある妻は家事や育兒などには關係せず男子の仕事に匹敵するやうな何か高尙の仕事をした方が女子の位置や價値を高からしむる所以であると言ふ工合に考へて居るものがあるやうである。

此考も一應は尤である。殊に妻たるものが下女や乳母の勞役より以上に價値ある何事をも爲す能はざる無能無教育の女子であるか又は才能あり教育があつても下女や乳母の勞役だけの事より爲なかつたならば家事や育兒の價値は女子自からの輕蔑を買ふのみならず男子から見ても誠につまらぬ事になつて仕舞ふ。併し自分の考は正反對である。家事や育兒は遣り方によつて成程下女や乳母の仕事に過ぎぬと思はれやうけれども遣り方がよければ優に男子の職業に匹敵しその如何は其家の幸福に止まらず實に國家社會の幸福を左右するものである。家事と育兒とを價値あらしむると然らざるとは全く女子の覺悟如何によるものである。一家の經濟は實に國家の財政の基礎となり一家の經濟は女子が其中心となつて居ることは今更說明を要すまいと思ふ。更に進んで妻の慰安と激勵とが如何に夫の事業の能率に關係し事實上妻の內助が夫の成功を左右しつゝあることもあまりに明白なることである。一家の團欒が如何に夫の精神狀態に關し夫の精神狀態が直接に其

事業の能率に關するかも世人の周知する所である。世上何人が一家團欒に於ける妻の力を疑ふものがあらうか。若し妻たる人が相當の教育あり才能があれば直接に家庭内で夫の事業を助くることが出來よう。斯樣に考へて來たならば妻の任務は極めて重大なもので男子の仕事に比べて少しも恥づべき所は無いのである。女子が若しよく之を盡せば男子も亦必ず效績を認めねばならぬのである。若し男子が之を認めなかつたならば夫は男子の不明不當である。妻たるものは自重して其任務の價値を自覺すべきであると思ふ。妻としてこの任務は斯く重大であるから其任務を十分に盡すには男子が職業に從事するときに必要なものに少しも劣らぬ人格も頭腦も知識も趣味も入用である。男子が職業に從事する爲に教育が必要であるとすれば女子は妻としての任務を盡すに之に劣らぬ教育が入用であると言はねばならぬ。

母が子を教育して行く上から考へて見れば女子の使命は妻としてよりも一層重大なものがある。賢母の手に育つた子が父母よりも幾層偉い人物になり又は大事業をなし遂げた例は枚擧に遑あらずである。之に反し母が教養の途を誤まつた爲めに幾多の惡人罪人を生じたことも同樣である。

要するに良妻賢母の任務は重大である。之を盡すのは女子の特性卽ち其長處を發揮するにあるのである。女子は良妻賢母たるによりて最もよく女子の本領を發揮し其生命を價値あらしむるものである。然るに家事育兒を價値なきものとして捨てゝ之を顧みざるが如きは全く自己の使命と價値とを無視するものと言はねばならぬ。是は決して女子の爲に得策では無いと思ふ。

二、良妻賢母たるものは妻として並に母としての特有の任務の外には何事をもなしてはならぬか。

女子は結婚して妻としては夫婦相和し家事を整理し子を生んではよく養育し又教育して行けば女子の任務の全部を盡したもので其他には何も爲すべき事なく又何事をも爲してはならぬのであるか今少しく之を攻究して見度い。是は良妻賢母主義に就いて提出した第二の疑問である。舊式な良妻賢母主義の固陋の考を抱いた人は此主義を極めて偏狹に解釋して女子の仕事の範圍を良妻賢母特有の任務に制限し若し此範圍を出でたものがあれば宛ながら罪惡でも犯したやうに考ふるものがあるやうである。自分は先づ茲に女子は妻となり母となつても男子と共通に人

間として又國民として爲すべき事があると云ふことを明かにし度いのである。女子のすべき事は徹頭徹尾女子に特有の仕事で全然男子と異なつて居ると考ふるのは極めて皮相の考へ方である。

先づ身體の衞生に就いて考へて見やう。女子の特別衞生を除いて仕舞へば大部分は男女共通である。食物をよく咀嚼するのは男であるからでも無ければ女であるからでも無い。此は人間一般に同樣に必要である。つまり男女によつて違ひは無いのである。傳染病の如きも男女によつて遠慮會釋は無いものである。それで人間には人間として男女に通じた普通衞生法が必要である。女子も人としては男子と全く同じ衞生法を守らねばならぬ。男子も女子も一樣に健康なる身體が必要である。之を心意の上に就いても心理の法則は男女に通じて原則は違ふもので無い。眼の視覺も耳の聽覺も能力に於ては男女に根本的の相違は無い。男女の別によつて色々に見え方や聽え方が違ふのでは無い觀念想像記憶思考等も之を支配する原則は男女共通である。是が普通心理學の成立する所以である。隨つて知識技能の如きも其本質に於ては男女の區別は無い。男子の用ふ國語と女子の用ふ國語とに讀み方書き方乃至意味が違ふ事も無く學び方や敎へ方に大なる根本的相違も

無い。此外修身や算術や理科唱歌圖畫體操等に就いて考へても同樣である。學校では家事と裁縫とは女子に特有な學科になつて居るけれども之とても男子に絕對的に敎へられぬものでは無い。又家事と裁縫との敎師は女子でなければ出來ぬと限つたもので無い。此等は知識技能として考ふれば男女孰れにも共通であり得べきものである。

國民として特に心得べき國民道德の知識は勿論國語國史日本地理其他風俗習慣の如きも男女の別なく一樣に必要と言はねばならぬ。

德性に就いて考へて見ても固より男女の相違はあるけれども父母に孝なるのも朋友に信なる等人道の大部分は皆男女共通である。趣味に就いても同樣に男女共通の趣味があることは爭はれぬ。繪畫音樂文字等孰れも男女に共通であることが出來る。

小學校及中等の學校で授くる普通敎育には男女に共通な人間の能力を養ひ且つ人間として又國民としてて必要な知識技能を授け德性を涵養し趣味を養成するのが重なる目的である。殊に小學校の敎育の如きは女子に特有の事は極めて小部分で男女によりて差を設けぬ方が勿論多いのである。高等女學校に於ても其敎育の

内容は男女に共通の事が大部分を占めて居る。是が普通教育卽ち人間の教育である所以である。

結婚したる女子は一方に於ては妻たり母たる資格であるけれども一方には男子と共通な人たり國民たる資格を備へねばならぬ。併し良妻賢母の中には人たり國民たる資格を包含して居るものであると解釋すれば此二つの資格は一つの資格になつて仕舞ふと言つても必ずしも差支は無いのである。けれども良妻賢母たるには必ず人として又國民として男女共通の資格が缺けてはならぬと言ふことを明瞭にして置かねば此資格が無視せられ又は沒却せらるる虞がある。つまり偏狹な良妻賢母主義は家事と育兒とに關係のない事は女子は心得ぬでもよいと言ふ愚蒙の意見となり易いのである。良妻賢母の仕事を家事と育兒とに限つて仕舞ふのは問題に提出した通りに『良妻賢母たるものは妻として並に母として特有の任務の外には何事もしてはならぬ』と斷定すると同樣である。之は女子特有の任務に囚はれた考で良妻賢母の意義を餘り狹隘に解釋し人として又國民として共通の部分あることを無視した考へである。

自分の考ふる所によれば女子が家事と育兒とを擔任するのは男子が職業に從事

するのと同樣に考ふべきもので是れは男女の間に生じた自然の分業の結果で卽ち特殊の任務である。男女分業の特殊の任務の上に人間として又國民として共通の任務があるのである。女子が良妻賢母の特有の任務卽ち家事と育兒との外に當人として又國民としての務をせねばならぬのは男子も夫として又父として一家を支ふる爲に職業に從事する上に人として又國民としての務をせねばならぬと同樣である。つまり人として國民としての務は男女に共通なもので男子の職業女子の家事育兒が男女によつて異なるものである。

男子が友人と交際したり散步に行つたり娛樂の爲めに諸藝を學んだりするのは職業の爲めでもなければ又一々夫又は父としての資格で行ふのでは無い。此等は結婚してもしなくても全く人として行ふものである。女子も之と同樣に學校の時代の朋友を訪問するとか之に手紙を出すとか其人の爲に用をするとか言ふことは勿論妻として又は母としての身分でやつて居るけれども之を無理に良妻賢母の特有の任務の中に包含せしむることは穩當で無いと思ふ。之は夫の爲又は子の爲に行ふので無くして全く人として友人に對する務をして居るもので此女子が結婚すると否とに拘らず、又子を有すると否とに拘らず行ふ所である。又敵國人が金錢を

以て誘惑して國家に不利益なやうな事を聞かうとした時に誘惑に抵抗して之に應ぜぬのは夫の爲又は子の爲と云ふよりは國の爲であると言ふ方が適切である。何故なれば此は必ずしも妻たり母たる人の特有の務で無くて男女に拘らず國民一般の務であるからである。斯の如く妻としまた母としての特有の任務と人間として又國民として男女共通の任務とは明かに區別することが出來るのである。此等が往々混同せらるゝのは之を實行する人が同一の個人であるからである。

男子は人として國民としての教育として國民普通教育を受け後に職業に關する特別專門の教育を受くるのである。併し男子は職業に從事する際に普通教育によつて習得したる所を絶えず活用して居ることは勿論である。

女子が小學校と高等女學校とて男女共通の人として又人間としての普通教育を受けて居ることは別に述べた通りである。さて良妻賢母の家事(裁縫を含む)と育兒とは男子の職業に相當するものであるけれども日本の現在の狀態では專門教育として之を修めて居るものは教員となるものゝ外は極めて少數である。一般の女子は特別の專門教育又は職業教育として之を學ばず小學校又は高等女學校の普通教育に附帶して之を學んで居るのである。此意義に於て我國の高等女學校は男子の

中學校に比ぶれば著しく專門的職業的の性質を帶びて居るものと言はねばならぬ。自分は重ねて言ふが女子は良妻賢母として家事育兒をやる事は男子の職業に相當するもので女子に特有なる任務を盡して居るものである。而も此任務を盡すに際して男女に共通な普通教育の效果を活用して居るのである。國語も算術も理科も圖畫も本來男女に共通するものであるけれども女子は之を家事育兒に活用し男子は之を職業に活用するのである。

女子の任務に良妻賢母に特有のものの外に尙人として國民としての任務があることは以上述べた所で明瞭であると思ふ。結婚した女子は通例人として及國民としての任務を良妻賢母と言ふ資格で行つて居るものである。換言すれば妻として又母として特有の任務を盡す上に人として又國民としての任務をよく盡すものを良妻賢母と稱すべきである。切言すれば、良妻賢母であることが女子に取りては人間として又國民として最も善い道であるのである。けれども自分が提出した第二の疑問に對しては『良妻賢母たるものは妻として並に母として特有の任務の外に何事をもしてならぬと言はれぬのみならず寧ろ進んで人として又國民としての任務を盡さねばならぬ』と答へねばならぬ。切言すれば女子も人として又國民としての

任務を盡さなければ眞の良妻賢母と言ふことは出來ぬのである。

眞の良妻賢母は人として又國民としての任務を盡して始めて其面目を完うするものであるけれども其特有の任務卽ち家事と育兒とを除いて外の男女共通の任務を盡す場合には其方法手段に於ては決して男女同一であらねばならぬと言ふ理由は無い。妻たり母たるものは何事をなすにも此資格を無視して行ふことは出來ぬのである。妻又は母が人間として又は國民としての務を爲す時は妻又は母であるが爲めに之を行ふのでは無いけれども之を行ふに際して妻又は母の資格から離れて全然之と無關係になる事は出來ぬ。妻又は母は妻母として人間及國民の務を行はねばならぬのである。從つて良妻賢母の特有の任務以外の任務を行ふ場合に於ても其行は常に妻母の色彩を脫却する事は出來ぬのである。同じく男女共通の人間又國民の任務も之を實行するときには妻母の色彩を帶びなければならぬのである。換言すれば女子の特色卽ち性的特徵によつて支配されて來るのである。

女子は良妻賢母の特有の任務で無い事をして居つても若し夫れが女子の長所卽ち性的特徵を發揮するものであつたならば狹義の天職と直接の關係が無くとも女子が男子と區別されて此世に生れて來た使命を盡して居るものと見て善いと思ふ。

女子の性的特徴は妻たり母たることに最もよく發揮さるものであるけれども其以外の事にも同樣の事を見ることが出來るのである。男女は各孤立しては人間の眞意義をなさず結婚して夫婦となり社會の一單位を作りて始めて一人前の人間と言はるゝやうに人類の文化を全體として見渡せば男子は男性的貢獻をなし女子は女性的貢獻をなして始めて圓滿の發達を見るべきものであると思ふ。若し人類の文化が男子計りの力若しくば女子計りの力で出來たものとすれば餘程偏頗なものになるに相違ないものと思はねばならぬ。

女子は良妻賢母たることが女子として最もよく人類の爲になり又國家の爲となることである。けれども前にも詳論したる如く女子は又良妻賢母に特有の任務の外に人類の爲國家の爲に盡すべき幾多の途がある。而して之を盡すには女子の長所を以てするのが女子の使命であると言はねばならぬ。

結婚したる女子は良妻賢母たることが女子の第一の使命であるとすれば其任務を盡すことが何よりも先きで之がやがて女子の人たり國民たる任務の重大なるものに數へられねばならぬ。故に妻たり母たるものが其特有の任務を放棄して男女共通又は男子の事業に奔走するのは女子の使命を完うして居るものとは言はれぬ。

併し妻として母としての任務は充分に盡し毫も之を犧牲に供することなくして女子の長所を發揮し得べき事業に從事するとは女子の天職を無視するものでなくて却つて其使命を完うするものと言はねばならぬ。例へば中流以上の婦人が赤十字社、特志看護婦人會愛國婦人會の會員となり又は社會の慈善事業救護事業矯風事業等に相當の盡力をなす如きものである。併し妻たり母たる人が全然其特有の任務を放棄して此等の事業に奔走するのは勿論本末顚倒と言はねばならぬ。

結婚したる女子の良妻賢母に特有なる任務以外の事に就いて是非共茲に一言して置かねばならぬ事は其の職業の問題である。卽ち既婚婦人が職業に從事するの可否である。良妻賢母主義を最も狹隘に解するものに取りては主婦が職業に從事するのは女子が男子の領分に侵入する一種の罪惡の如く感ぜらるゝものである。併し人文發達の歷史に遡つて之を考ふれば男子が職業に從事し女子が家事育兒に從事するやうに分業が定まつたのは勿論夫婦の制度が成立してから以後の事で現今でも社會の各階級で必ずしも此通りに行はれて居るのでは無い。野蕃の時代に女子も其獨立生活の爲めに自分から勞働せねばならなかつた。今日でも村落の農家では主婦は家事や育兒もやるけれども男子と同樣に農業にも從事する。都會の

商工業を營む家でも主婦が家事育兒の餘暇に家業を助くることが出來る場合には皆之を助くる方が主婦の任務を盡すものとせられて居る。此の如く中流以下の社會が主婦が家業に從事し又は必要に迫まられて職業又は勞働に從事する事については世人も敢て怪しまぬのである。之に反して上流の人は生活の爲に職業に從事する必要は殆んど無いから主婦の職業問題は結局主として中流社會に起るのである。自分の考を明瞭に言へば主婦は其特有の任務を妨げざる範圍に於て職業又は生産的勞働に從事することは決して不都合では無いと思ふ。結婚した女子が夫を失ひ又は夫の不治病に出會た場合に職業に從事して家計を助くる如きは寧ろ美德とすべきである。然るに主婦は良妻賢母の特有の任務の外の事は何でも爲てならぬと云つて農民の妻の農業を禁じ都會の商家の主婦が家業に從事することをやめ勞働者の夫婦共稼ぎを差止めたならば日本國内の生産力を減じ日本の富力に關係することと少くないのみならず之を必要とする家庭では到底經濟的壓迫に堪え得ぬと信ずるのである。自分は國家の立場から言ふても一家の立場から言ふても主婦が餘裕ある限り家業を助け又は職業に從事することは寧ろ之を奬勵し主婦が家事育兒を名として其實家事育兒の上にも何等價値ある活動をせぬものを警醒し度い

のである。現今歐洲大戰亂に於ける婦人の活動を考へたならば思ひ半に過ぐるものがあらう勿論主婦の本務を放擲し母の務を怠つて職業に從事するのは其家の爲より考へても國家人類の大局より考へても大に之を非難すべきものである。

三、結婚せぬ女子又は結婚することの出來ぬ女子は女子の使命を完うする途は全く無いのであるか。

此第三の疑問に對する自分の解答は前に述べたる所に包含されて居るけれども今簡單に其要點を擧げて見やう。

女子は結婚する前には良妻賢母の性質を具へて居つても實際に其任務を盡すことは出來ぬ。家庭の事情又は其他の理由によりて婚期が甚しく後るるものがあり稀には終生獨身で暮さねばならぬ人もある。若し女子が結婚しなければ女子の使命を完うすることが出來ぬものとすれば此等の人々は女子として生れて來た甲斐が全然なくつて仕舞ふ譯になる。果して然りとすれば女子の特色もなくまして男子の特色もなく人間から男女の特色を引き去つた男女共通の仕事より出來ぬ事になるのである。自然が男女の別を立てた趣旨を全然沒却して未婚の女子に斯樣の

事をさせて置くことは人類の爲めに策の得たるものであらうか吾人は深く考慮を要するのである。

結婚せぬ女子又は結婚することの出來ぬ女子は全く男女の特別の關係を離れて人間として世に立ち大に人道の爲めに盡さうと志す人が少く無い。或は從來男子の獨占とされた方面に突進して男子と競爭しやうと試みる女丈夫も現はれて居る。而も此等の人々が男子に劣らぬ成功を收めて居るものもあるのである。併し自分の考へを以てすれば女子には天賦の性的特徴があるから之を良妻賢母として發揮するのが最もよく女子の使命を完うしたるものであるけれども若し夫れが出來ぬものとすれば他の方面に於て女子の長處を發揮する途があると思ふ。卽ち結婚以前にも女子の使命を發見する場所があると信ずるのである。

結婚したる女子の職業問題は旣に之を論じたが未婚者の職業の必要は旣婚者より一層甚しいものである。是れは殆んど全く經濟上の壓迫から來るもので若し女子は良妻賢母たるより外に途は無い結婚が出來ずば一生父母の家に留まつて家事育兒の手傳より外の事は一切手を觸れてならぬとしたならば生活上に來す困難は旣婚者より一層甚しいのである。一家に數人の女子あり孰れも結婚せずとすれば

其家に相當の資產がなければ此等の女子を養ふことが出來ず其の一家は偏狹なる良妻賢母主義に囚はるる爲に生活に窮せねばならぬのである。此等の女子が職業を求め生活難の壓迫に一方の血路を開くことは自然の順序で又當然の要求と認めねばならぬと思ふ。

經濟上已を得ざる場合には女子が自活糊口の爲めに職業に從事することが正當と認められたとしても女子があらゆる職業で男子と競爭することは女子の爲にも人類の爲めにも得策では無いと思ふ。自分の考を直截に言へば女子は必要なるときは女子の長處を發揮するやうな職業に從事する方が女子の爲又人類の爲に幸福である。而して是は直ちに良妻賢母とならぬでも亦女子の使命を完うする所以に近づくものであると思ふ。

自分の考ふる所によれば古來女子の職業として發達して來たものは多く直接又は間接に家事又は育兒に關係したことが多い。近年になつてからは次第に男子獨占とされた職業に女子が從事するやうになつて來たけれどもよく穿鑿して見れば女子の長處が其職業の上に發揮されて居るのが多いやうである。

下女、侍女、料理人、裁縫師、洗濯婦、理髮師等は言はずもがな看護婦や女醫は全く新し

いけれども煎じつむれば妻の任務を擴張したものに外ならぬ。保姆教師宗教家の如きも母の任務を間接に盡すものと見て差支無い。此等は孰れも女子の長處を以て立つものである。其他事務員小說家俳優音樂家美術家として立つものも女子の長處を以て本領とするものが大に成功して居るやうに思はるる。是等は女子の使命を異なりたる方面に齎らして居るものと見ることが出來る。

學問や藝術の天才は女子としては寧ろ除外例であるから一概を以て律し難いものであるけれども自分の考へでは己を得ざる以上はとも角結婚して出來るものであるならば女子は結婚して女子の特色を充分に發揮した方が自然であると思ふ。彼の佛國のキューリー夫人の如きは適例である。

糊口の爲めに職業に從事する必要もなく又結婚もせず社會の中流以上に位する婦人も少なからぬのである。此等は全く女子の使命を此世に果す途は全く無いのであるかと言ふに決してさうでは無い。此等は既婚の婦人が職業以外に女性の長所を以て社會に貢獻することが出來ると同じ樣に出來るのである。卽ち女子の特性を以て社會の爲め人道の爲に盡して社會生活及文化の上に女性の感化を及ぼすことである。女子が若し此方面に充分の效績を擧げたならば假令結婚はせずとも

人類社會に女子の使命を傳へたることは何人も拒む可らざるものであると思ふ。

『女子は其性的特徴を以て此世に於ける使命を完うし又之によりて其生存を價値あらしむべきものである』と言ふのが自分の最後の結論である。